

吸入曝露については、一般環境大気中の濃度についてみると、予測最大曝露濃度は0.013 µg/m³未満程度であった。無毒性量等 0.19 mg/m³と予測最大曝露濃度から、動物実験結果より設定された知見であるために10で除して求めたMOEは1,500超となる。従って、本物質の一般環境大気の吸入曝露については、現時点では作業は必要ないと考えられる。

有害性の知見				曝露評価			リスクの判定			評価		
曝露経路	リスク評価の指標			動物	影響評価指標 (エンドポイント)	曝露の媒体	予測最大曝露量 又は濃度		リスクの判定			
経口	無毒性量等	0.40	mg/kg/day	ラット	赤血球数等の減少、網赤血球数の増加、脾臓の髄外造血亢進など	飲料水	—	µg/kg/day	MOE	—	×	○
						公共用水域・淡水	0.0036	µg/kg/day	MOE	11,000	○	
吸入	無毒性量等	0.19	mg/m ³	マウス	嗅上皮の変性	一般環境大気	<0.013	µg/m ³	MOE	>1,500	○	○
						室内空気	—	µg/m ³	MOE	—	×	×

4. 生態リスクの初期評価

急性毒性値は、藻類では緑藻類 *Pseudokirchneriella subcapitata* の生長阻害における72時間 EC₅₀ 15,900 µg/L、甲殻類ではオオミジンコ *Daphnia magna* の遊泳阻害における48時間 EC₅₀ 201,000 µg/L、魚類ではメダカ *Oryzias latipes* の96時間 LC₅₀ 100,000 µg/L超、その他の生物ではテトラヒメナ属 *Tetrahymena pyriformis* の増殖阻害における40時間 IGC₅₀ 1,023,000 µg/Lが信頼できる知見として得られたため、アセスメント係数100を適用し、急性毒性値に基づく予測無影響濃度 (PNEC) 159µg/Lが得られた。

慢性毒性値は、藻類では緑藻類 *P. subcapitata* の生長阻害における72時間 NOEC 2,560 µg/L、甲殻類ではオオミジンコ *D. magna* の繁殖阻害における21日間 NOEC 100,000 µg/Lが信頼できる知見として得られたため、アセスメント係数100を適用し、慢性毒性値に基づく予測無影響濃度 (PNEC) 25 µg/Lが得られた。

本物質のPNECは、藻類の慢性毒性値から得られた25 µg/Lを採用した。

PEC/PNEC比は淡水域で0.004、海水域では0.02となるため、現時点では作業の必要はないと考えられる。

有害性評価 (PNECの根拠)			アセスメント係数	予測無影響濃度 PNEC (µg/L)	曝露評価		PEC/PNEC比	PEC/PNEC比による判定	評価結果
生物種	急性・慢性の別	エンドポイント			水域	予測環境中濃度 PEC (µg/L)			
藻類 緑藻類	慢性	NOEC 生長阻害	100	25	淡水	0.089	0.004	○	○
					海水	0.49	0.02		

5. 結論

	結論		判定
健康リスク	経口曝露	現時点では作業は必要ないと考えられる。	○
	吸入曝露	現時点では作業は必要ないと考えられる。	○
生態リスク	現時点では作業は必要ないと考えられる。		○

[リスクの判定] ○：現時点では作業は必要ない、▲：情報収集に努める必要がある、■：詳細な評価を行う候補、×：現時点ではリスクの判定はできない

(○)：情報収集等を行う必要性は低いと考えられる、(▲)：情報収集等の必要があると考えられる、(—)：評価の対象外、あるいは評価を実施しなかった場合を示す